

平成 30 年度 日本獣医師会獣医学術賞の受賞者及び受賞研究業績

本年度の日本獣医師会獣医学術賞の選考は、「獣医学術奨励賞」は日本獣医師会雑誌の平成 28 年 8 月号（第 69 巻第 8 号）から平成 30 年 7 月号（第 71 巻第 7 号）に掲載された原著・短報を対象に、「獣医学術学会賞」は獣医学術学会年次大会（神奈川）において発表された地区学会長賞の中から、「獣医学術功労賞」は推薦のあった永年の功労の業績の中から、選考委員会において厳正に審査され、平成 30 年度 日本獣医師会獣医学術学会年次大会（神奈川）における授与式において、本会蔵内会長から本賞（賞状）が、協賛会社（日本全葉工業㈱、共立製薬㈱、日本ハム㈱）から副賞（研究奨励金 20 万円（目録））がそれぞれ受賞者に授与された。表彰された受賞者及び研究業績の一覧は次のとおり。

平成 30 年度 日本獣医師会獣医学術賞受賞業績

【産業動物部門】

獣医学術奨励賞：

「妊娠後期に腸管手術を実施したサラブレッドの血中プロゲステロン及びエストラジオール測定による妊娠管理」

佐藤正人（日高地区農業共済組合家畜診療センター），他
 〈選考理由〉 本論文は、妊娠後期のサラブレッド繁殖雌馬の腸管手術後において、治療効果の判断項目としてホルモン濃度測定による胎子・胎盤機能の評価を行ったもので、学術的新規性が高く、手術時の胎齢 250 日以降、血中プロゲステロン濃度に基づいた投薬のフローチャートを提示するなど、臨床症状を考慮した治療介入の総合判断にきわめて有益であることから、獣医学術奨励賞として推薦する。

獣医学術学会賞：

「腹腔鏡で視認した牛の立位時腹腔内潜在精巣の解剖学的位置と腹腔内触診によるアプローチ法の検討」

鳥巢至道（宮崎大学），他
 〈選考理由〉 本研究は、従来、摘出手術時に腹腔内を盲目的に探索していた牛の潜在精巣について、腹腔内における位置及び左右差を、腹腔内潜在精巣症例（46 例）について検討した。腹腔鏡を用いた立位観察により、精巣の解剖学的位置を正確に把握することが可能で、この位置は左右で異なること、また、腹腔内潜在精巣の触診によるアプローチ法では、左右の膀胱間膜に沿った位置に精巣が存在することが多いことを明らかにした。これら知見により、牛の臨床現場でただちに活用可能で画期的なアプローチ法を提示したことから、獣医学術学会賞にふさわしい研究として推薦する。

獣医学術功労賞：

「牛の遺伝性疾患の発見と防除対策及び農場の飼養衛生管理システム構築に関する研究」

酒井淳一（元山形県農業共済組合連合会・参事）
 〈選考理由〉 酒井淳一氏は、日常診療の中で牛の損耗率が高い原因として、潜在する遺伝性疾患が関与することを明らかにし、関係機関との連携により病態を解明するとともに、防除対策の確立に努めてきた。また、現在も家畜臨床学会や農場 HACCP 研究会の会長を努めるなど、後進の育成に尽力している。さらに、同氏は、日本獣医師会の各種委員会委員や日本産業動物獣医学会の副会長として本会と本学会の運営に貢献されたことから、獣医学術功労賞の授与が相応しいと判断した。

【小動物部門】

獣医学術奨励賞：

「獣医神経病 2 次施設における犬の神経病発生状況調査」

中本裕也（KyotoAR 獣医神経病センター・京都府），他
 〈選考理由〉 本論文は、4,000 症例以上の神経病症例について、その疾患の種類と発生状況、犬種との関連性、診断年齢中央値などを詳細に調査報告したもので、臨床的意義が高い。また、病変の部位毎の詳細な分析も行っており、海外の報告と異なる傾向が示されているなど臨床的情報量も多く、今後の分析調査の基礎となるべき報告であることから、獣医学術奨励賞として推薦する。

獣医学術学会賞：

「犬の特発性乳び胸に対する鏡視下手術の治療成績」

堀切園 裕（日本大学），他
 〈選考理由〉 本研究は、根治の難しい乳び胸に対する鏡視下での胸管閉鎖術並びに心膜切開に加え、乳び槽切開術を組み合わせ治療した症例の成績をまとめたも

のである。実施した12例すべてで乳びの再貯留は認められず、これまでの報告よりも低侵襲で高い治療成績を示した。また、術前にCTリンパ管造影検査やICGによる術中リンパ管染色を実施することで、より確実にリンパ管走行を把握して手術精度を上げることが可能であることを明らかにした。これらの結果は、今後の乳び胸治療に対してきわめて有用な情報提供となり、獣医学術学会賞にふさわしい研究として推薦する。

獣医学術功労賞：

「獣医臨床における鎮静・鎮痛及び吸入麻酔に関する研究と普及」

高瀬勝悟（北里大学・名誉教授）

〈選考理由〉 高瀬勝悟氏は、長年にわたり獣医臨床において鎮静・鎮痛と吸入麻酔に関する研究と、その普及に携わってきた。特にセボフルラン吸入麻酔を小動物分野に世界に先駆けて導入し、国内だけでなく世界もリードしてきた業績は高く評価できる。同氏はこれらの活動を通じて、獣医麻酔外科や動物臨床医学の学会理事を歴任し、獣医麻酔分野の研究と教育の向上に努められた。また、同氏は日本小動物獣医学会（東北）地区学会長及び青森県獣医師会理事も歴任され、獣医師会の学術活動や運営に貢献された。これらの業績により、同氏への獣医学術功労賞の授与は相応しいと判断した。

【公衆衛生部門】

獣医学術奨励賞：

「輸入カニクイザルにおける結核症の集団発生事例」

大江紗希（農林水産省動物検疫所成田支所）、他

〈選考理由〉 結核は、感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律では二類感染症に分類され、また、猿の結核は獣医師の届出義務があることから、きわめて重要な疾病である。しかし、輸入サルに結核については情報が無いのが現状である。本論文は、ツ

ベルクリン検査で結核が疑われた輸入カニクイザル9頭について、病理組織学的、細菌学的、分子生物学的に調査し、遺伝子型EAI2_MANILLAの結核菌が数カ月以上前に群内に侵入した後、伝播・拡散した可能性を示しており、公衆衛生上、きわめて有用であると判断されたので、本論文を獣医学術奨励賞に推薦する。

獣医学術学会賞：

「と畜検査データの農場へのフィードバックと疾病対策の実践 ～豚抗酸菌症の事例～」

遠矢宏美（宮崎県都農食肉衛生検査所）、他

〈選考理由〉 本研究は、宮崎県内の一農場で多発していた豚抗酸菌症について、と畜検査データを基に食肉衛生検査所、管理獣医師及び農場従事者が連携してその発生原因を究明し、発生数の低減を可能にしたものである。また、家畜衛生と公衆衛生分野が積極的に連携したことは、日本獣医師会が推進しているワンヘルスの実践例として参考になる事例であるとともに、安全で衛生的な食肉の供給における貢献がきわめて大きいと判断されたことから、獣医学術学会賞にふさわしい研究として推薦する。

獣医学術功労賞：

「ボツリヌス菌及びボツリヌス毒素に関する基礎研究」

小崎俊司（大阪府立大学・名誉教授）

〈選考理由〉 小崎俊司氏は、致死的な食品由来感染症であるボツリヌス症の疫学解明の一環として、生化学的、分子生物学的、免疫学的研究手法を駆使して、原因毒素に関する多くの新知見を明らかにしてきた。一方で、平成18～24年まで日本獣医公衆衛生学会の理事・近畿地区学会長を歴任するなど、日本獣医師会並びに日本獣医公衆衛生学会の運営・学術活動に大きく貢献した。以上から、同氏は獣医学術功労賞を授与されるに相応しいと判断した。



左から、
佐藤正人氏、鳥巢至道氏
酒井淳一氏、中本裕也氏
藏内勇夫（公社）日本獣医師会会長
堀切園 裕氏
高瀬勝悟氏、大江紗希氏
遠矢宏美氏、小崎俊司氏